



# ありあけ

佐賀大学農学部  
同窓会報  
No.26

発行日 2020年7月1日  
編集 会報編集委員会

発行 佐賀大学農学部同窓会  
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700  
E-mail dousoukai@sadai.jp  
ホームページ <http://sadai.jp/alumni/nougakudousoukai/>

## 巻頭言



## 新しい時代の同窓会へ

佐賀大学農学部同窓会 会長 水田 和彦  
(S51年卒 農土・機械)

### 新型コロナ下でのスタート

平成から令和へ、新しい時代の幕開けは2年目にして、新型コロナウイルスというかつてない感染症に襲われました。三密で言われるように会議が開催できず、学校も休校となり、大学では新入生は入学式もなく友達も、先生方も知ることもなく不安な新年度のスタートとなっています。

同窓会でも総会が開催できないままに新年度を迎えることとなりました。2年に1度の役員改選の年でありましたので、総会承認を受けることもままならず新しい役員でスタートとなりました。

私は、そういう事情の中で新しい会長を仰せつかった水田和彦と申します。昭和51年に農業土木学科を卒業しました。農業高校に37年奉職した後は、実家の田畑の管理を理由に自由気ままに過ごしています。そんなことから教職員支部の推薦を受け会長に就任することになりました。これから2年間よろしくお願ひします。

総会については前述の通り開催できませんでしたので、その資料は農学部同窓会のホームページにて掲載しております。パソコン、スマホでホームページを訪問され、ぜひご覧いただきたいと思ひます。同窓会のホームページは農学部だけではなく全学や他学部の同窓会も見応えのある内容になっています。特に、現在は全学同窓会長も農学部出身の川副操会長、佐賀大学も理工学部出身の兒玉浩明学長が就任されており、身近に感じられるのではないかとと思ひます。

### 新たな視点に立って

さて、新型コロナウイルスは私たちに多くの教訓

を示してくれています。自分の健康のためには何かが必要か、死と隣り合わせの人生とは何か、はたまた組織のトップとしての行動や判断の大切さなど、今までの常識では計り知れない難しさと先をどのように見通していくかの識見の大切さを教えてくれます。

この原稿を書いている時点でもまだ先が見通せない感を強く持つとともに、社会の中でも新しい生活習慣の推奨が叫ばれています。そのような中で、私の周りを見てもウォーキングを始めたり、テレワークという職場から離れ自宅での勤務など生き方に関して今までとは違う視点から動き始めている人がいます。

このような新しい時代に、同窓会をいろいろと活用して、人生を豊かなものとする一助にさせていただければ、お世話する私たちとしてもうれしい限りです。新役員29名で皆さんとともに同窓会を盛り上げていきます。



佐賀大学美術館ブルーライトアップ

\*コロナ禍のさなか奮闘されている医療従事者の皆様への感謝と敬意、激励を込めてのライトアップ  
(写真：佐賀大学美術館提供)

## 令和2年度第35回農学部同窓会総会について

第35回農学部同窓会総会を5月16日に開催する方針で準備を進めて参りましたが、新型コロナウイルスの全国的な感染拡大に伴いやむなく中止することになりました。その経緯につきましては農学部同窓会ホームページでもお知らせいたしておりましたが、実際に会することが叶わなかったことで、総会の大事さを改めて思い知らされたところです。  
例年どおりの体裁で資料作成し、会計については監事の監査を受けておりますものの、会員の皆様へは会報掲載によるご報告のみとなりました。ご了承のうえ、お目通しいたきますようお願いいたします。  
前会長 小池良美（S56年卒 農学・農経）

### 令和元年度事業報告及び収支決算

(H31.4.1～R2.3.31)

#### ■事業報告

令和元年度において次の事業を執行し、農学部同窓会の円滑な運営、支部活動の充実に努めた。

- ①大学と同窓会との意見交換会を開催するなど相互に連携した取組を行った。
- ②在学生支援として、在学生・教職員・卒業生の交流会を開催した。
- ③大学主催の就職ガイダンスの講師として会員を派遣した。
- ④会員や大学先生方などの投稿により、会報「ありあけ」第24、25号を発行・配布した。
- ⑤農業技術経営管理士（農業版MOT）養成の取組に連携して協力支援を行った。
- ⑥農学部及び全学同窓会支部の総会等に役員が参加し交流を図った。
- ⑦同窓会員名簿のデータ管理及び会員への閲覧を行った。

#### ■収支決算

(1) 一般会計

##### 【収入の部】

単位：円

科目	令和元年度 予算 (A)	令和元年度 決算 (B)	比較増減 (B-A)
前年度繰越金	217,956	217,956	0
会費	3,560,000	3,663,000	103,000
学生(新入生)	3,080,000	2,970,000	-110,000
一般会員	480,000	693,000	213,000
雑収入	132,044	256,008	123,964
特別会計戻入	800,000	600,000	-200,000
計	4,710,000	4,736,964	26,964

##### 【支出の部】

単位：円

科目	令和元年度 予算 (A)	令和元年度 決算 (B)	比較増減 (B-A)
事務費	1,160,000	1,034,777	-125,223
会議費	450,000	446,615	-3,385
事業費	800,000	673,747	-126,253
組織強化費	330,000	386,955	56,955
全学同窓会負担金	1,540,000	1,485,000	-55,000
特別会計への繰出金	370,000	622,500	252,500
学生入会金	70,000	67,500	-2,500
会費平準化準備金	300,000	555,000	255,000
予備費	60,000	0	-60,000
計	4,710,000	4,649,594	-60,406

\*収入4,736,964-支出4,649,594=87,370(次年度繰越)

(2) 特別会計

##### 【収入の部】

単位：円

科目	令和元年度 予算 (A)	令和元年度 決算 (B)	比較増減 (B-A)
前年度繰越金	12,834,938	12,834,938	0
一般分	6,977,914	6,977,914	0
会費平準化準備金	5,857,024	5,857,024	0
入会金	70,000	67,500	-2,500
会費平準化準備金	300,000	555,000	255,000
雑収入	62	505	443
計	13,205,000	13,457,943	252,943
一般分	7,047,920	7,045,421	-2,499
会費平準化準備金	6,157,080	6,412,522	255,442

##### 【支出の部】

単位：円

科目	令和元年度 予算 (A)	令和元年度 決算 (B)	比較増減 (B-A)
繰出金	800,000	600,000	-200,000

\*収入13,457,943-支出600,000=12,857,943(次年度繰越)

### 令和2年度事業計画及び収支予算

(R2.4.1～R3.3.31)

#### ■事業計画

- ①会員に対し同窓会をより身近なものとしていくため、支部の体制・活動をより充実するとともに、会報を発行するなど各種情報の提供を行う。
- ②更なる組織の強化・活性化を図るために、支部未加入者を対象として既存支部への加入促進や、地域組織との連携を図る。
- ③農学部と同窓会との意見交換会を開催するなど、相互に連携した取組を行う。
- ④準会員である学生に対する支援を行うとともに、卒業生との交流促進に取り組む。
- ⑤農業技術経営管理士（農業版MOT）養成の取組に連携して協力支援を行う。

#### ■収支予算

(1) 一般会計

##### 【収入の部】

単位：円

科目	令和元年度 予算 (A)	令和2年度 予算 (B)	比較増減 (B-A)
前年度繰越金	217,956	87,370	-130,586
会費	3,560,000	3,640,000	80,000
学生(新入生)	3,080,000	3,080,000	0
一般会員	480,000	560,000	80,000
雑収入	132,044	182,630	50,586
特別会計戻入	800,000	800,000	0
計	4,710,000	4,710,000	0

##### 【支出の部】

単位：円

科目	令和元年度 予算 (A)	令和2年度 予算 (B)	比較増減 (B-A)
事務費	1,160,000	1,110,000	-50,000
会議費	450,000	450,000	0
事業費	800,000	800,000	0
組織強化費	330,000	320,000	-10,000
全学同窓会負担金	1,540,000	1,540,000	0
特別会計への繰出金	370,000	430,000	60,000
学生入会金	70,000	70,000	0
会費平準化準備金	300,000	360,000	60,000
予備費	60,000	60,000	0
計	4,710,000	4,710,000	0

(2) 特別会計

##### 【収入の部】

単位：円

科目	令和元年度 予算 (A)	令和2年度 予算 (B)	比較増減 (B-A)
前年度繰越金	12,834,938	12,857,943	23,005
一般分	6,977,914	7,045,421	67,507
会費平準化準備金	5,857,024	5,812,522	-44,502
入会金	70,000	70,000	0
会費平準化準備金	300,000	360,000	60,000
雑収入	62	557	495
計	13,205,000	13,288,500	83,500
一般分	7,047,920	7,115,500	67,580
会費平準化準備金	6,157,080	6,173,000	15,920

##### 【支出の部】

単位：円

科目	令和元年度 予算 (A)	令和2年度 予算 (B)	比較増減 (B-A)
繰出金	800,000	800,000	0
計	800,000	800,000	0

## 令和2年度農学部同窓会役員の選任

役職	氏名	卒年・学科(専攻)	備考
会長	水田 和彦	S51・農土(機械)	教職員支部
副会長	森田 昭	S52・農学(農経)	佐賀県支部
副会長	田中 宗浩	H 4・生(施設)	佐賀大学
副会長	田中 治	S59・園芸(園工)	農協連支部
理事長	河野 宏	S63・農学(畜産)	佐賀県支部
理事(編集長)	松尾 孝則	S52・園芸(植病)	佐賀県支部
理事	吉賀 豊司	H 2・園芸(応動)	佐賀大学
	郡山 益実	H 7・生(浅海)	
	福田 伸二	H 7・応生(植ウ)	
	宮本 英揮	H10・生(水利)	
	徳本 家康	H14・生(水利)	
	龍田 勝輔	H15・応生(害虫)	
	納富 麻子	H 4・応生(遺資)	佐賀県支部
	千住 泰彦	S63・農土(土改)	
	木下 剛仁	H 8・応生(育種)	

役職	氏名	卒年・学科(専攻)	備考
理事	安藤 新一	H14・応生(遺資)	農協連支部
	江口 秀孝	H 2・農化(食管)	教職員支部
	福田 喜隆	S63・農土(土改)	佐賀市役所
	溝口 善紀	S53・農学(病理)	佐賀県支部
	荒木 清史	S54・農化(醗酵)	
監事	石橋 泰之	S60・農学(病理)	佐賀県支部
	瀬尾 裕一	S63・農学(育種)	佐賀県支部
支部長	成澤 義和	S58・農学(病理)	佐賀県支部
	大坪 正幸	S59・農学(農経)	教職員支部
	古藤 英樹	H 4・応生(植病)	農協連支部
	福島 末行	S50・園芸(果樹)	佐賀県支部
	大庭 英二	S51・園芸(果樹)	農業自営者の会
	花田 健児	S47・農学(病理)	神埼支部
	三原 順一	S58・農学(育種)	熊本県支部

- ・赤字表記の役員は、今回新たに就任される方
- ・青字表記の役員は、再任で役職変更の方
- ・卒業年次は学部卒年を表記

## 同窓会長賞の授与

令和元年度の同窓会長賞に4名が選ばれ、佐賀大学同窓会長賞が水崎菜月さん、農学部同窓会長賞が松元里里さん、手嶋恭子さん、牧貴広さんに授与されました。いずれも優れた研究成果と社会貢献活動が高く評価されました。今後の一層のご活躍を期待したいと思います。

## 同窓会長賞 受賞者の手記



## 佐賀大学同窓会長賞

生物資源科学科  
機能性植物資源学分野

## 水崎 菜月

この度は、同窓会長賞という大変名誉ある賞を頂き、誠にありがとうございました。私は在学時に「佐賀大学エコアクション学生委員会EARTH」の代表を務めました。EARTHを中心に様々な環境活動に携わり、多くの貴重な経験をさせていただきました。

EARTHでは、活動の一環として1年生の必修科目である大学入門科目の環境教育という講義で依頼のあった学部、学科で授業を行いました。佐賀市と佐賀大学内でのゴミ分別の方法の違い、佐賀大学の環境への取り組みやエコ豆知識などの紹介が主な内容です。生活する中で必ず出るゴミを適切に処理できているかなど、改めて自分の行動を見直す機会となるよう工夫した授業にしました。

また、佐賀大学と佐賀市が連携して開催する「佐賀環境フォーラム」では学生スタッフを務めました。全国から講師をお招きし、学生と市民や法人の方が一緒に講義を受けたり、実際に体験したりしながら

学ぶという活動の企画や運営を行いました。様々な年代や立場の方々が一体となり、幅広く環境問題について学ぶ場の提供に携わりました。

その他にも、東日本大震災で被害を受けた福島県でのボランティア活動や海岸漂着ゴミが問題となっている壱岐島での清掃活動などに取り組みました。紹介できなかった活動も多々ございますが、このような活動を行う中で、環境問題という大きな問題に立ち向かうには1人1人の意識が変わること、1人1人が行動し続けることが大事だということを学びました。私の取り組んだ活動が意識を変える、行動を起こすきっかけとなっていれば幸いです。1人のできることは小さなことかもしれませんが、その小さなことの積み重なりが大きな力となり、明るい未来へとつながっていくと信じています。

令和2年4月より、農林水産省職員として生命を支える「食」と安心して暮らせる「環境」を未来に継承するという使命を果たすべく、執務を行っています。これまでの経験を糧に、日本の農林水産業に貢献できるよう尽力していきます。また、これまで関わってくださった皆様に恩返しができるように日々精進します。





## 農学部同窓会長賞

生物資源科学科  
生産環境科学分野

松元 美里

この度は、農学部同窓会長賞という荣誉ある賞を頂き、深く感謝申し上げます。私の研究テーマは、イモグサレセンチュウという線虫に寄生されたニンニクから発生する「特徴的なにおい」の分析・特定法の検討です。

線虫に寄生されたニンニクは見た目では分からないこと、腐敗が早まることから、ニンニク生産の現場では大きな問題となっています。また、防除に利用される薬剤によるヒトの健康や環境への影響が懸念されています。その一方で、寄生されたニンニクには特徴的なにおいがあるといわれています。これらより、薬剤使用量を抑え、生産現場で簡易的に寄生されたニンニクの発見のため、においを利用できないかということで研究が始まりました。

においを分析するための技術は、主に食品や香料分野で利用されており、本研究のように環境や農学分野への利用はほとんどありませんでした。そのため、初めてのことが多く、一緒に研究をしてくださった先輩や指導教員の上野大介先生と日々相談を重ね

ながら、においのサンプリング方法や分析方法について検討を重ねました。これら検討結果の発表を行った第31回におい・かおり環境学会、第28回日本環境化学討論会では、成果が認められ、優秀発表賞を頂きました。また、日々の実験や学会発表、学会誌投稿作業に打ち込む傍ら、佐賀県の東よか干潟にてボランティアガイド活動にも取り組んでいました。本賞ではこれらの活動について評価をしていただきました。

私がこうした様々な活動に取り組むことができたのは、温かく優しい方々に支えられていたからだと思います。立ち止まったときに励まし支えてくださった先生方や友人、その他の皆様に感謝いたします。

特に、最後まで熱心にご指導くださった指導教員の上野先生、技術的なご指導等をいただきました松尾美咲氏には、この場をお借りして深くお礼申し上げます。

私は、令和2年4月より、空調設備の設計、施工を行っている会社で働き始めました。これまでお世話になった沢山の方々に恩返しすることができるよう、精進していく所存です。最後になりましたが、この度はこのような名誉ある賞をいただき、大変有難うございました。



## 農学部同窓会長賞

生物資源科学科  
作物生態生理学分野

手嶋 恭子

この度は、農学部同窓会長賞という大変光栄な賞を頂き、誠にありがとうございます。私は、植物と菌の共生過程についての研究に取り組みました。研究対象とした菌根菌は、多くの陸上植物と共生して土壤中の栄養分を供給し、宿主植物の成長を促進します。一方、宿主植物は菌根菌にエネルギー源として光合成産物を供給します。

従来の見解では、このような植物と菌の共生において双方が分泌する化学物質がシグナルとして働くとされていますが、私はそれらの化学物質だけではなく、光も共生シグナルとして働く可能性について研究を行いました。そして、研究の成果を植物微生物研究会による第29回研究交流会で発表した際には、ポスター賞を頂きました。

研究過程では愛知県にある基礎生物学研究所においての学外研究にも取り組みました。時間や環境が限られる中での実験は上手くいかないこともありましたが、周囲の方々のお力添えもあり遂行すること

ができました。さらに、研究所では沢山の研究者の方々と関わる機会があり、非常に貴重な経験となりました。

また、今回の受賞につきましては修士1年の時に交換留学生としてウィルフリッド・ロリエ大学（カナダ）で学んだことも評価して頂きました。留学先では、Spanish River Carbonate (SRC) という、オンタリオ州北部で採取できる火山堆積物由来の鉱物と菌根菌の関係に着目した研究を行いました。

SRCには作物成長を促進する効果があるため、菌根菌との相乗効果が期待できるのではないかと研究を進めました。周りに日本人がいない中での研究活動や授業は大変なこともありましたが、非常に充実した日々を過ごすことができました。

修士課程は、様々な経験を積むことができた非常に密度の濃い2年間となりました。これは、ご指導頂きました有馬教授と鈴木教授、そして様々な面で協力してくれた家族のおかげであると思っています。本当にありがとうございます。

私は令和2年4月に医薬品等のバルクメーカーに入社しました。在学中に学んだ知識や経験を活かしながらお世話になった皆様、ひいては社会のために恩返しができるよう日々精進いたします。



## 農学部同窓会長賞

生物環境科学科  
環境地盤学分野

牧 貴 広

この度は、農学部同窓会長賞という大変名誉ある賞を頂きありがとうございます。私がこのような賞を得ることができましたのは、多くの皆様方のご支援とご指導のおかげだと存じます。本当に心から感謝を申し上げます。

近年のICTの発展に伴い、様々な場所のデータを収集することが比較的容易になり、構築したビッグデータを基にした研究も数多く報告されるようになりました。一方、土壤関連分野におけるこのような研究事例は僅かであり、ビッグデータの活用方法についてのノウハウが確立されていないのが現状です。私は、卒業研究として『機械学習を利用した実蒸発散量の予測』に取り組みました。実蒸発散量とは、農地からの水の消費量の一つであり、植物を育てる上で必要となる土壤中の水分を詳細に把握するために必要な要素の一つです。

私の所属研究室では、IoTプラットフォームを活用して、この実蒸発散量の推定に必要な農地環境

データをリモートで収集、モニタリングしています。農地を取り巻く環境はその場所に対して多くの影響を与えます。例えば、大気が乾燥するほど農地からの水の蒸発が促進される、といったものです。私は、卒業研究としてこの農地環境データを活用し、土壌中の水分の評価方法の確立を試みました。

これまでは、数値解析によるシミュレーションが主な評価方法として用いられていましたが、第三次AIブームと言われる現代において、これまでの評価方法に一石を投じることはできないかという思いで機械学習を取り入れることを決めました。

私自身、これまでにプログラミングを行った経験は無く、当初は四苦八苦していたのが苦い思い出です。幸いにも私自身がプログラミングに対して嫌悪感を抱くことなく、むしろ楽しんで行うことができたため、結果を出すことができました。昨年度はこの研究結果を基に3件の研究発表を行い、2019年度土壤物理学会では、ポスター発表で優秀ポスター賞を頂くことができました。

令和2年4月からは佐賀大学大学院農学研究科に進学し、引き続き研究に取り組んでいます。今回の受賞を糧に、今後も精進する所存です。

## 研究最前線

### 新分野：藻類・ベントス学の紹介

生命機能科学コース 藻類・ベントス学分野 特任教授  
(元佐賀県有明水産振興センター 所長)

川村 嘉応



農学部では、平成29年度に様々な問題を抱える農・水産業の課題解決・発展を図ることを目的とした「地域の農水圏生物生産・利用技術の高度化プロジェクト」が立ち上がりました。それに対応できる研究室として一昨年9月に農学部になかった新しい藻類・ベントス学分野が創設され、私、木村圭准教授、折田亮助教（現在、学生5名、研究員2名、技術補佐員2名）が担当することになりました。

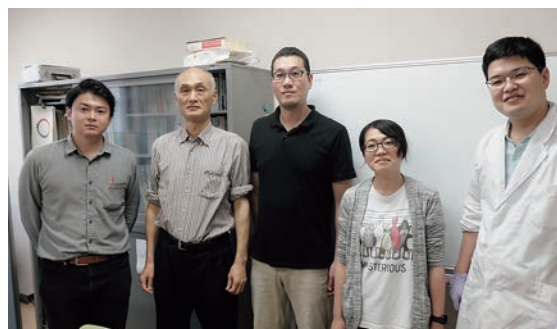
ここでは、新分野で行っている研究について概略を紹介いたします。

皆さんは藻類・ベントスとは何だと思われるでしょう。まず藻類ですが、一番身近なところでは有明海で養殖されているノリではないでしょうか。ノリの研究は育種、病害、生理生態、さらには生産技術と多岐にわたります。

新分野で挑戦しているのはノリのゲノム解析を活用した研究で、これを産業に結び付けていこうというものです。次世代型シーケンサーが登場したのち、急速に発展して全ゲノム情報の取得にかかる時間と費用は大幅に削減されました。ノリの全ゲノム解析は数万円でできる時代なのです。ちなみに佐賀大学でノリゲノムを再度解析した結果、塩基数は約1億bpという値でした。人は約30億bpですからノリは

かなり小さいものです。

このゲノムを解析することでノリの種類判別、品種分類、品種開発等の育種までできるようになります。しかし、ゲノム解析は技術として難しく今のところ永野幸生准教授（総合分析実験センター）の独壇場です。その第1報はすでにWEB投稿されました（bioRxiv “Genomic diversity of 39 *Pyropia* species grown in Japan”）。興味ある方は是非ご覧になってください。従来ですと、いろいろな手法を組み合わせて解析してはじめてわかることでしたが、全ゲノムを一度に解析することで詳細で明確なものとなってきました。この解析手法が誰にでも使えるようになれば新技術としてノリだけに限ら

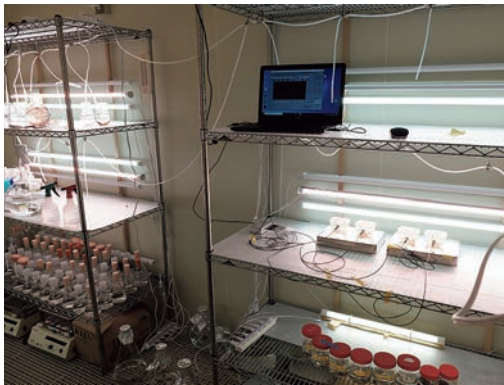


左から折田、川村、木村、水谷・吉田（研究員）



ず藻類全般へ応用されていくものと期待されます。勿論、ノリ産業へいかに活かしていくか。まずは育種に繋げないといけません。品種改良・開発の簡略化、時間の短縮化など以前とは異なる時代がやってきそうな気配があります。このような先端の研究が実際に佐賀大学で進行中であり、佐賀大学オリジナル品種の開発によって地元産業に寄与できるようにしたいと思っています。

話は変わります。ノリ葉体は正常であれば赤黒い色であることを皆さんご存知でしょう。しかし海中の栄養塩が不足するとノリは栄養失調し黄色のノリになる（色落ち）ことは意外と知られていません。ノリ養殖業界は色落ちノリの生産が漁家経営安定の最大のネックであるとして色落ちノリを赤黒いノリに戻す技術開発を切望しているため、この研究を企



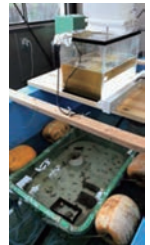
ノリの室内培養

業、漁協等と連携・共同して進めています。

また木村先生は、この色落ちノリの原因である赤潮原因種の一つである珪藻を研究対象としており、PCR法（最近コロナ禍報道で良く出てくるのでご存知と思います）を応用して、その分類や増殖機構の解明につながる研究を行っています。さらに珪藻に感染しているウイルスの研究では木村先生が世界的なコレクションを携え、最先端を走っています。このような研究を進めるとともに佐賀大学のノリ基盤研究の拠点化を目標にしています。

次にベントスです。ベントス、和名にすると底生生物と呼称されます。アサリ、アゲマキなどの貝類やゴカイの仲間と言えればお分かりでしょうか。ベントス分野では有明海の特産生物である、アゲマキとサルボウの二枚貝を中心に、それぞれの遺伝子解析や生理研究によって、アゲマキ資源の回復に寄与できる技術開発、サルボウについては貧酸素環境でも生育可能な品種の作出を目指しています。折田先生が佐賀大学で作出した、サルボウが食卓に上るのを夢見て取り組んでいます。

このように藻類・ベントス学分野では地元佐賀県に密着しながら県等の公的機関ができないような研究を行い、なおかつ世界に向けて発信できる成果を出したいと思っています。今後とも長い目で温かく見守っていただければ幸いです。



二枚貝飼育

## 恩師からのメッセージ

### さがん大地讃頌

有馬 進



同窓生の皆様には、お元気でご活躍のことと存じます。私は佐賀大学に36年間勤務し、この3月に定年となりました。また、私は本学の卒業生でもあり、足掛け47年間お世話になりました。お陰様で農学部での楽しい思い出が溢れています。皆様に心から感謝致しております。ありがとうございました。

さて、私の自宅は佐賀大学農学部から南西に約2km、旧鍋島藩主・龍造寺家菩提寺の高傳寺の傍にあり、南には水田地帯が広がっています。私は食用作物に関わる仕事柄、稲・麦・大豆の作況の観察を兼ね、日に1万歩ほどの田園ウォーキングを楽しんでいます。日本屈指の穀倉、佐賀平坦の四季を味わう贅沢な時間です。とりわけ収穫時期のウォーキングは最高です。黄金色に輝く穂波の中を歩くと、そこはかとなく幸せな気分になります。

思わず、カンタータ「土の歌」第7楽章「大地讃頌」の歌詞が口をついて出てきます。♪母なる大地のふところに……大地を愛せよ 大地に生きる 人の子ら その立つ土に感謝せよ と。

そして、佐賀の水田がいついつまでも守られ受け継がれるようにとの祈りが湧いてきます。ちなみに、本文に掲載した絵画は、遠くに秀峰・天山を望む佐賀の田園風景で、「水田」\*と名付けられた油絵です。この絵には今ではもう見る事ができない佐賀平坦の原風景が描かれています。

佐賀の風景は、この絵のような過去から現在へ、そして未来へと変わりゆくでしょうが、佐賀の豊かな大地（水田）に支えられて人々が幸せに暮らせることを願って止みません。

しかしながら、不作年のウォーキングは楽しさが半減し、むしろストレスフルです。不作への対処をなんとかできないのか、と悶々としていた6年前、不作の救済技術に関わる農水省研究事業「多収阻害要因の診断法及び対策技術の開発」の話があり、満を持して事業運営に携わりました。この3月に大豆と麦の技術支援マニュアルを組み上げて、以下の通

り公開しております。覗いて頂けたら幸いです。  
 (「大豆マニュアル」：<https://www.maff.go.jp/j/seisan/ryutu/daizu/attach/pdf/index-127.pdf>)  
 (「小麦・大麦マニュアル」：[http://www.naro.affrc.go.jp/publicity\\_report/publication/pamphlet/tech-pamph/134377.html](http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/134377.html))

勿論、このような技術マニュアルだけでは、救済効果の範囲も限られています。佐賀をはじめ全国の水田農家の安定多収を期待している次第です。

末筆ながら、農学部同窓会の発展と同窓生の皆様のご健勝をお祈りしております。

※この絵画は、田中典幸名誉教授と親交があった日展会友の江口孝徳画伯の作品で、農学部創設・発展に尽力された藤井義典名誉教授が所有されたものです。



画題：「水田」

## 佐賀大学農学部の 我らがコース

稲岡 司



2002年4月から2020年3月まで18年間、農学部にお世話になりました。これまで農学部同窓会にはほとんど何の寄与もしてきておりませんが、遊び仲間の内海先生からのご依頼でもあり、一言書かせていただきます。

農学部は私が赴任してから2度改組し、2学科4専攻から3学科4コースに、そして1学科4コースへと変わりました。聞くところによれば国立大学の農学部で最も教員の少ない大学なのに、改組に関わらず今まで農学の多様性を維持してくれたことに、特に私は感謝すべきかもしれません。と言うのも私の専門は人類生態学・国際保健学という分野で、農学と関連するのは途上国の開発と農業に関わる境界領域なので、いつ無くなっても不思議ではなかったからです。

ともあれ、私が所属していた講座は最初が地域資源管理学、次が地域社会開発学、そして国際地域マネジメント、とある意味その時代の先端を行く夢のある名称でした。その分、コース自体がまだまだ試行錯誤中のため、コース教育や研究には相当努力させられた、いまだにさせられていることも事実で、同僚だった五十嵐さん、藤村さん、辻さん、中井さん、最近加わった藤井さん、加えてMOTの内海先生、OBの武田先生、小林先生、白武先生には本当にお世話になりました。

そんな中でコースの学生だった人達への思い出は語りつくせないほどありますが、紙面の都合で割愛します。ただ、我々のコースは、OBの努力もあって農学部の中でも教員当たりの外国人留学生の数が最も多いコースになっており、国籍も年齢も異なる

多種多様な学生が集まり、加えて社会人を相手にする(今は学部でも始まりました)MOT教育もあって、日本人の元気な若者以外にも多様な学生が入学・進学しては卒業・修了するという、大変面白い場所になっています。

これは農学部や大学に対する要望ですが、我々のコースのような多様な学生の教育・研究要請にもっと応えられるように、コースや学部を超えて協力する体制を(例えば学部横断的なプロジェクトなども用いて)構築することにご理解とご協力をお願いしたいと思います。

コロナ禍がまだそれほど騒がれていなかった2月の初めに最終講義をさせてもらいました。その時には、この18年間に私の学生だった人達が日本人以外にもアフリカから東南アジアにかけて(どうやって旅費を都合したのか知りませんが)多数集まってくれました。皆が皆、お酒を手土産として持ってきたのにはやや閉口しましたが、18年という時間を実感するとともに、各人がそれぞれの立場で立派に活躍してくれていることを大変嬉しく思い、私の先生がよく言っていた「親は無くても子は育つ」を思い出した次第です。最終講義の時や宴席でも言ったと思いますが、これからは農学部の非常勤を数年続ける傍ら、辻さんらのバーチャル研究所のプロジェクトに乗って、今まで殆どやってこなかった、途上国の人達への恩返しをしたいと思っております。





## 若手OB・OGからのメッセージ

### 不透明な時代!前を向き今できること、 今しかできないことに全力を!

佐賀県立伊万里農林高等学校 山田 大地  
(H22年卒 生物環境科学科 資源フィールド科学)

私は現在、農業高校で農業科の教員をしています。農業高校は、植物の栽培や動物の飼育、農業土木や造園、食品の加工など農業全般についての知識や技術を学ぶ学校です。

もともと自然が大好きだった私にとって、農業高校はとても魅力的な職場です。毎日、汗をかきながら生徒とともに農業に励む。また、農業を学ぶ中で生徒が人間的に成長していく過程に携われる毎日は本当に充実しています。

こんな私ですが、大学に在学していたのは今から10年前で、当時は「リーマンショック」による世界的不況に見舞われた時期でした。また、国内でも「内定取消し」などの言葉が流行るなど、多くの大学生は、就職活動に大変苦戦しているような時期でした。そのような中、特にこれといったやりたい仕事も見つからず、なんとなく大学生活を送り、なんとなく就職活動をしていた私も苦戦していた1人で、卒業を控えた2月まで、その後の進路は決まっていませんでした。

そんな私に、「教員免許を持っていなくてもいいから、教員をしてくれる大学生を探している」と声をかけてくださったのが、佐賀県の農業高校でした。その2ヶ月後、私は一瞬たりとも考えたことがなかった高校の先生として、教員免許も持たないまま(臨時免許は発行してもらいましたが)教壇に立っ

たのでした。しかし、教員としての知識も技術もなかった私は、毎日悪戦苦闘。目的を持って大学時代を過ごさなかった自分に後悔し、それからは、通信教育で教員免許を取得しながら農業についてこれまでにないくらい勉強しました。その結果、念願の教員免許も取得して、なんとか採用試験にも合格し、大学卒業から4年後に佐賀県教員として正式に採用されました。

今でも思うことは、やはりもっと目的や目標を持って大学生を送ればよかったということです。しかし、後悔して今だからこそ言えることは、目標を持って目の前のことに一生懸命取り組んでいけば、必ず道は開けるということです。また、その開けた道がどんな道であろうと、相変わらずこつこつと頑張る中で、そこにやりがいや価値が見いだせてきます。

今世界は、新型コロナウイルスの感染拡大により先行きが不透明な状況になってしまいました。経済への打撃も大きく、大学生の皆さんは卒業後の進路に大変不安を感じていることと思います。先行きが見えづらい今だからこそ、前を向いて今できること、今しかできないことを頑張してほしいと思います。

最後に、将来何をしようか迷っている学生はもとより、企業等で頑張っておられる方を含め、「農業高校で農業を教える」という選択肢はいかがでしょうか。免許の取得は今からでも遅くないかもしれません。同窓生の皆様の今後のご活躍を心から祈念いたします。



### 多くの人々と知り合う機会を 積極的に作って!

佐賀県庁農産課 柿本 望  
(H27年卒 応用生物科学科 熱帯作物改良学)

佐賀大学農学部大学院を卒業してから6年目となりました。学部ではアマランサス、大学院ではヒマワリを供試材料としたテーマで研究に取り組み、自ら畑で農作物を栽培し、それをういて実験を行いました。栽培期間中は毎日欠かさず圃場へ足を運び、植物の生育を確認しながら水管理や施肥、農薬散布等の農作業を行いました。

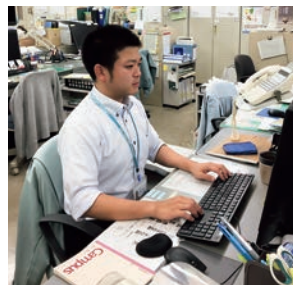
農作物を栽培することの楽しさと難しさに触れたことがきっかけで、次第に農家と関わりのある仕事をしたいと感じるようになり、佐賀県庁の農政職に就職しました。

入庁後5年間は「佐賀中部農林事務所 佐城農業改良普及センター」に勤め、花き担当として農家に

対する栽培技術及び経営指導を行いました。

佐賀県には、先進的な栽培技術と高品質な花きの生産へのこだわりを持った農家が多いことから、実際は農家から学ぶことばかりでした。熱心な農家と話をしていると、少しでも自分が力になりたいという想いが生まれます。そして、共に研鑽し合える関係が、農家との間に築け始めたと感じた時から、仕事のやりがいを強く感じるようになりました。

「佐賀県庁農政職」と言っても職場によって業務内容は大きく異なります。農家等への栽培・経営指導を行う業務、栽培・育種など研究を行う業務、事業の企画から活用推進を行う業務など様々です。今年から農産課に異動となり、佐賀県の新規就農者の育成・確保や、農業労働力確保への支援等に関する業務をしています。業務内容が大きく変わり





分からないことが多く不安な点もありますが、知らないことを知るといことはそれだけで新鮮さを感じることができると同時に、学ぶ機会にも多く触れることができるため、日々充実しています。

自分の学生時代を振り返ると、結婚式場や塾・家庭教師、引越しや農作業等、アルバイトに費やした時間が長かったと感じます。佐賀大学には多くの部

活やサークル等があります。皆さんには、多くの人々と知り合う機会を積極的に作って貰いたいと思います。また、今しか出来ないことに限らず、やりたいと感じたことを積極的に実行してほしいと思います。卒業式当日、皆さんが有意義な大学生活だったと感じられることを願っています。

## 会員のた場

### 農業高校におけるJGAP認証取得に向けた取り組み 大坪 正幸 (S59年卒 農学・農経)

全国の農業高校では、東京オリンピック・パラリンピックへの食材提供の基準となっているGAPの学習に取り組んでいます。

GAP (Good Agricultural Practice) とは、農業における食品安全、環境保全、労働安全等の持続可能性を確保するための生産工程管理の取組のことで、JGAPはGAPに関する日本版の認証制度です。

令和元年度には佐賀県内の高志館高校が青果物(トマト・メロン)、佐賀農業高校が穀物(米)のJGAP認証農場を取得しました。ここでは高志館高校園芸科学科のJGAP認証取得への取組を紹介します。

園芸科学科では普通教科に加えて、農業後継者並びに農業関連技術者の育成を目的に、1年次より農業に関する専門科目を3年間で34単位以上(1単位×35時間/年間)学んでおり、GAPについては園芸科学科の生徒全員が、GAPの目的や認証取得で得られるメリットなど全般的な事柄の指導を受けています。

今回JGAP認証取得に取り組んだ生徒は野菜専攻班の3年生5名で、3年生は科目「課題研究」でテーマごとに1年間の研究班活動を行い、より高い専門的な知識・技術を習得しており、その成果としての認証取得でした。なお、この研究の指導には、JGAP指導員基礎研修に参加し試験に合格した高志館高校の農業科の教諭が当たり、また、佐賀県の佐城農業改良普及センターJGAP担当者の方々にも適宜指導助言をいただけたことで認証を取得することができました。この場をお借りし感謝申し上げます。

生徒たちはJGAPのチェックシートにある項目について本校園場等の現地調査から始め、その中でクリアできていない項目についての対策を話し合い、審査に合格するための改善を地道に行いました。例えば、野菜の栽培時に使用している農薬の成分を調べて農薬庫内を適切に管理できるようラベルの表示やカギの保管などに取り組み、また、栽培した野菜の安全性を消費者に担保できるよう残留農薬や使用水の検査を外部機関に委託するなど客観的な評価を得ることも取り組みました。その他、収穫調整時の動線や作業スペースの区分域を色テープで分けるなど可視化することにも取り組みました。

生徒たちは模擬審査を経て令和元年12月7日土曜日、日本能率協会審査登録センター審査員による本審査に臨み、午前中はチェック項目ごとにまとめ上げた書類について審査員からの聞き取り審査が行われました。審査員の質問に対して取り組み状況を回答しその証拠となる帳簿類の記載内容等について説明するという形式でした。

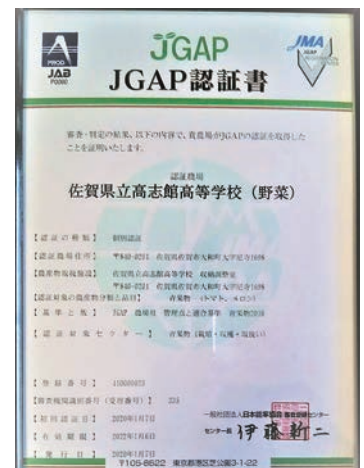
午後からは圃場と収穫調整室、農薬庫、資材庫、燃料庫などの現場審査が行われ、ここでも審査員からの質問に回答する形式で審査が進められました。審査終了後は、審査員が1時間ほど報告書をまとめ上げる時間があり生徒たちはその間待機し、その後、審査結果報告書が示され、不適合項目についての指摘とその是正内容が告げられました。

生徒たちは指導教諭と共に、12月中に是正内容に関する改善報告書を作成し審査機関へ提出し、その結果、令和2年1月7日付けで「JGAP認証書」が生徒の元へ届けられました。

この研究班活動を通して生徒たちは、安全な食品を届ける責任を痛感し、農業関連の企業へ就職する生徒にはこの経験が職場で活かせるものと考えています。また、他産業へ就職する生徒たちにも、整理整頓による安全な職場環境の整備や見える化による業務の効率化はどの職場においても重要な働き方の要素であり、その意味ではGAP学習は全ての生徒にとって社会に出る前に必要な教育であると改めて感じました。



GAP書類審査の様子



# 支部だより

## 農業自営者の会

## 農学部同窓の農業自営者が一堂に会し、士気高揚

「農業自営者の会」が令和2年2月23日、佐賀市のグランデはがくれで開催され、農学部卒業の農業自営者と恩師（現・名誉教授）ほか関係者を含めて総勢39人、地元佐賀県内はもとより、福岡、長崎、熊本からも参加されました。



開会にあたり、大庭英二会長（S51年卒）から「昨年の総会の折、農業に頑張っている仲間が多い。広く呼びかけて集まろうというのが発端。本日の会を、明日からの活力源にしよう」と歓迎のあいさつ。

また、山口祥義佐賀県知事、大島信之JAさが代表理事組合長、一色司郎農学部副学部長にご臨席いただきました。

発表では、若い二人が登壇。(株)オプティム・サブマネージャーの岸山洋介氏からは、農業現場のあらゆるデータをデジタル化し、AI分析等を駆使して



生育、土壌、病虫害を管理する「スマート農業」をテーマに、その一例としてドローンを使った病虫害や雑草の検知・防除という最先端技術が実用化されている現状を紹介されました。

福岡県八女市のブドウ栽培農家、いっちゃんファーム代表の井手一郎氏（H20年卒）からは、これまで捨てられていた規格外を活用した巨峰ドレッシング「藤ざくら」の開発について紹介。「共創」を理念に掲げ、母校佐賀大学の研究室や佐賀農業高校の生徒とも連携しながら実現したもの。

懇談では、佐賀大学の酒として年々ファンも増えている“悠々知酔”で声高らかに乾杯し、お互いの近況を紹介しあい、農学部同窓の絆を深めました。

懇親会の締めは、がんばろう三唱で。参加者の中で一番若い二人、地元佐賀の古賀大智さん（H26年卒）と、長崎から参加した山口直輝さん（H25年卒）。先輩たちは、息子、孫の世代の掛け声に合わせて、こぶしを突き上げました。



お開きの前には、今回、裏方として準備に奔走された野口好啓氏（S41年卒、初代会長）から、平成9年に農業自営者の会が設立された経緯や、当時、知事と語る会を開催した思い出等も披露され、この会を盛り上げていこうと呼びかけられました。

小池良美（S56年卒 農学・農経）

## 農学部卒業生の皆様へ 会費納入のお願い

卒業生の皆様と同窓会事務局との接点を、変わることなく保っていくための「会費納入」のお願いです。農学部同窓会の運営経費は、会員の皆様から納入いただいた会費で賄われております。

同窓会活動さらには母校と後輩学生への支援にもつながっていることを含め、ご理解いただき、お力添えをお願いするものです。

### 〈会費〉

- (1) 1年会費は2,000円（毎年納入していただくものです）
- (2) 3年会費は6,000円（3か年分をまとめて納入していただくものです）
- (3) 70歳未満の方の終身会費は30,000円
- (4) 70歳以上の方の終身会費は15,000円

### 〈手続き〉

会費納入の方法は、現在、ゆうちょ銀行（郵便局）に農学部同窓会の会費専用として開設しております「振替口座」への払込の方法のみです。

最寄りのゆうちょ銀行（郵便局）にお立ち寄りいただき、手続きをお願いします。

※送付された「払込取扱票」（振込用紙）を紛失された方、または会費納入が途切れているため送付されていない方は、同窓会事務局（0952-23-1253）までご連絡いただければ、お送りいたします。

（会費納入についての詳細は、ホームページの「会費納入・住所変更等」のコーナーに掲載しております）



## 編集後記

● 農学部同窓会報「ありあけNo.26」をお届けいたします。本年度は新型コロナウイルスが世界的な規模で感染拡大し、地域社会の経済や生活の隅々までその影響が及んでいます。先輩諸兄の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

● 大学でも卒業式や入学式の中止、新学期からのオンライン授業など大変な時期を迎えています。一日も早く学生が戻り、活気あふれる大学になることを願っています。

● 令和元年度は、永年にわたって農学部の研究・教育を牽引していただいた地域循環生産学コースの有馬進教授、地域社会開発学コースの稲岡司教授、生物環境保全学コースの長裕幸教授の3名が定年退職になりました。教育・研究の推進や有為な人材を数多く輩出していただき、また農学部同窓会の発展のために大変ご尽力を頂いたことに対し会員一同深く感謝を申し上げます。

● 今回も多くのご投稿をいただきました。川村嘉応特任教授には、農学部の新しい研究分野としてスタートした「藻類・

ベントス学」の研究紹介をいただきました。日本の最先端をリードするこれらの研究がノリ養殖の新たな発展と有明海の多角的・持続的な発展につながることを大いに期待したいと思います。また、同窓会長賞受賞者の研究の取組や苦勞と活躍の様子、若手OBから在校生に向けた熱いメッセージ、会員の広場では農業高校におけるJGAPへの挑戦、さらに佐賀県知事を迎えるの農業自営者の会の開催模様など、ホットな投稿をいただきました。皆様に心からお礼を申し上げます。

● 今年度から新しく編集長に松尾孝則さん（S52年卒 園芸・植病）を迎えることになりました。これまで会報の編集に際し大変お世話になりましたが、今後とも農学部同窓会報「ありあけ」のさらなる充実・発展に向けて会員の皆様のご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。

編集担当：内海 修一（S47年卒 農学・農経）

## 協賛広告

この度の同窓会報発刊に際しまして、新型コロナウイルスの感染拡大の厳しい状況の中、皆様より協賛広告をお寄せいただき誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げますとともに、協賛各社の今後のご発展をお祈り申し上げます。

JAグループ佐賀 消費拡大運動実施中!

食べよう! 飲もう! 飾ろう!



耕そう、大地と地域の未来。



JAグループ佐賀

JA佐賀中央会/佐賀市栄町3番32号 TEL.0952-25-5115

JAグループ佐賀

検索



*Grain & Pet Care Communication*

# 株式会社 森光商店

〒841-8611 佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7  
PHONE.0942-85-1125(代) FAX.0942-83-8868

ホームページ <http://www.morimitsu.co.jp>

サラダ油・小麦粉といえば、  
やっぱり理研

